オーサカ建築のある風景

大阪府建築士会会長　岡本 森廣

外国人を中心に多くの観光客が訪れる大阪。万博開催を控え、さらなる来訪者の増加が見込まれる中で、まちなみや景観は世界に発信すべき大阪の魅力の1つといえる。そして、そのまちなみを形成しているのが大阪の建築である。この連載では、大阪府建築士会、日本建築協会、日本建築家協会近畿支部、大阪府建築士事務所協会の各トップに次代につなぎたい、世界に発信したい「オーサカ建築のある風景」を推薦していただいた。4回にわたって掲載する。

＝1＝

東邦製鏡ビルと玉造界隈（大阪市東成区）

若手が手掛けた三方良しの建築

＊　＊　＊

東邦製鏡は全国の観光地やリゾート地向けの民芸品、ファンシー雑貨、生活雑貨などを企画・製造・卸売している。1916年創立と歴史は長く、かつては社名の通り鏡製造御を営んでいた。同社が大阪市中央区から現在の大阪市東成区に本社を移したのは83年。当時としても創業70年に届こうかという老舗であったにもかかわらず、その本社ビル（東邦製鏡ビル）は斬新な意匠で、いまもその輝きを失うどころか磨かれた光を放っている。

天藤氏が手掛けた東邦製鏡ビル（左）。敷地から飛び出すような曲線のプロポーション

躯体はRC造打ち放しで、ともすれば地味になりがちなのだが、東邦製鏡ビルではスチールやガラスなどの素材が上手く活用され、原色のカラーパネルも効果的に配置されている。また、1階エントランスの上部は敷地から飛び出すような曲線のプロポーションを持ち、良いアクセントをつけている。

なにより最も感銘を受けたのは、この建築が竣工から35年を経ていまもなお、きれいに使用されているということだ。また打ち放しの精度・色合い良く、クラックなど劣化も見受けられない。それは施主に建築が愛されている証拠であり、優れた設計と確かな施工であったということ。まさに「施主」「設計」「施工」三方良しの典型と言える。

JR玉造駅から現地に向かうまで、前面の幅広い道路に面して似たような印象、あるいは競った残像すら感じるビルが散見された。これは東邦製鏡ビルが周囲に良い影響を与えたのではないかと思量している。いい建築はまちをつくるということだ。

設計を担当したのは、天藤公夫氏（アトリエ天藤一級建築士事務所）。当会の第30回大阪建築コンクールにおいて、この作品で渡辺節賞を受賞されている。竣工当時は30代前半と若手中の若手だが、作品の完成度は高い。加えて、老舗企業の顔ともいえる本社ビルを若手建築士に託した東邦製鏡の心意気にも敬意を払う。

オーサカ建築のある風景

日本建築協会会長　設楽 貞樹

幅44㍍の巨大な都市計画街路に銀杏並木。その両側に高さ100尺（31㍍）制限の建物が並ぶ。その軒の連なりの美しさが、いまも脳裏に焼き付いている。御堂筋はパリのシャンゼリゼやベルリンのウンターデンリンデンとも並び称される、大阪が世界に誇る街路である。

御堂筋は1926年に着工し、37年に完成した。当時は「船場に飛行場でもつくるんか」と揶揄（やゆ）されたそうだが、關一大阪市長（当時）の大英断であり、素晴らしい先見の明と言わざるを得ない。

そして沿道に並ぶ建物群が美しいことがさらに御堂筋の魅力を高めている。昭和初期の近代建築から戦後・高度成長期、バブル期、現在までそれぞれの時代を象徴する建物が立ち並んでいる。

＝2＝

御堂筋と沿道の建築群（大阪市中央区、北区）

軒の連なり美しい、世界に誇る街路

ことしで創立102周年を迎える当協会は、会誌『建築と社会』においてこの御堂筋の誕生から現在までをつづさに取り上げてきた。また、創立100周年記念事業では、沿道の老舗ビルの誕生（竣工）日を祝うイベントも開催した。まさに御堂筋の歴史は日本建築協会の歴史ともいえる。

御堂筋の100尺制限は時代のニーズとともに撤廃され、そろったまちなみの景観は失われつつある。個人的には、100尺制限は圧迫感のないヒューマンなスケールと思っているのだが、これも年配者の繰言だろうか。

新規制では、低層部が高さ50㍍、セットバックした高層部が100㍍と容積を積めるようになった。側道を歩道化する話もある。新しい時代のニーズに呼応してまちなみは変化し、新しい景観が形成されるのだろう。

都市は生き物である。時の流れに応じて経済的、社会的な要求は変わる。新規制が御堂筋の品格を保ちながらこれまでにないにぎわい、活気、華を生み出し、新時代の景観をつくりだすことを期待している。

建築協会としても、今後もこの御堂筋を題材に新時代の景観や、さらなるにぎわいづくりのためのアイデア募集を行うなど、大阪の誇りづくりに微力ながらも貢献していきたいと思っている。

上質な建築物が立ち並ぶ御堂筋（上）と商業ビルが集積するミナミ界隈

オーサカ建築のある風景 ＝3＝

日本建築家協会近畿支部長　井上 久実

2016年に大阪で日本建築家協会の全国大会が開かれることになったのを機に、改めて大阪の歴史、文化を勉強した。そのとき印象的だったのは、大阪がいかに上町台地を中心に発展を遂げてきたかということだった。

上町台地には、松屋町筋側の寺院が並ぶ下寺町と谷町筋側の夕陽丘を東西に結ぶ7つの坂「天王寺七坂」がある。北から「真言坂」「源聖寺坂」「口縄坂」「愛染坂」「清水坂」「天神坂」「逢坂」と名付けられたその坂は、多くが石畳と石階段で構成された細い道で、ゆったりとした時間が流れる風情のある。曇った日などには、坂の静かな風景にハルカスが違和感なく溶け込んでいる。

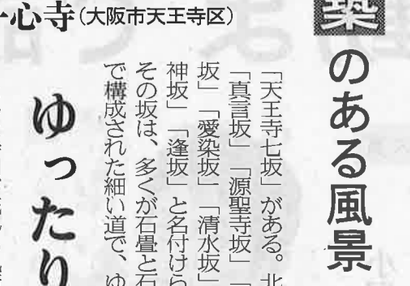
天王寺七坂と一心寺（大阪市天王寺区）

ゆったりした時間流れるスポット

逢坂の南では、一心寺が存在感を放っている。創建は118年だが、多くの仏閣は第二次世界大戦の大阪空襲により焼失。戦後徐々に復興したが、建築家であり住職も務めた高口恭行氏が手掛けた現代的な建築群がひときわ目を引く。

仏閣は常に耐震や耐火、維持管理の面で悩みを抱えているが、高口氏が手掛けた作品ではガラス、コンクリート、鉄といったさまざまな素材を取り入れ、現代の建築様式で課題を解決している。また、敷地外からも内側が垣間見えるような仕組みを取り入れ、都市型寺院として地域に積極的に開いていて、高い社会性を感じる。

高口氏は建築家として身を引かれているが、元は同じJIAの仲間。一心寺は、建築家が提示した現代寺院のあり方であり、素晴らしい功績と言える。



両側の塀が凛として美しい源聖寺坂（上）と現代寺院のあり方が提示された一心寺

オーサカ建築のある風景 ＝4＝

大阪府建築士事務所協会会長　戸田 和孝

木津川に架かり、大阪市大正区と西成区をつなぐループ橋・千本松大橋（通称・メガネ橋）。造船を始めとする工業地帯にあって、大型船が航行するのに必要な桁下33㍍を稼ぐため、両端を巻貝状にしてせり上げた形が地図上でメガネに見えるのでこう呼ばれている。

真下には橋の完成と同時に廃止されるはずだった市営の千本松渡船がいまも生き残っている。昔ながらの船着場と未来感のある構造物が一度に視界に飛び込んでくる、大阪の隠れた名スポットだ。

千本松大橋と千本松渡船（大阪市大正区、西成区）

一度に視界に飛び込む過去と未来

メガネ橋を徒歩で歩いてみた。巻貝を上がるのは一苦労だが、吹きさらしの橋上からの眺めは圧巻。空中散歩気分に浸ることができる、大阪一スリルのある片道20分の渡橋行だ。

この修行の後、帰りは対岸の渡船場から船に乗る。さっきまで震えながら歩いた橋を渡し船から見上げると、まるで印象が違う。ITやAI（人工知能）の時代になっても人間の体のつくりは大して変わっていないという身体性を実感した。

地図上ではただのメガネ状の橋。だが、実際見てみると人間の想像を超えるスケール感。そして、人間スケールの渡し船。設計における1本の線は図面ではただの線に過ぎないが、人に大きな影響を与えるということを再認識させてくれる。

これは、図面上の線が人間に何を及ぼすかというヒューマンスケールの問題だ。建築士は常に自分が書いた図面の空間に入った時のことを想像しながら設計しなければならない。ある学生に「建築士はそんなことまで考えるのですか」と言われたが、建築士はそういうことから考えるものだ。「生身の人間にとって建築にとって基本の問いである。の気持ち良さってなんだろう」。

（おわり・折田雄平）

千本松大橋と渡し船（上）と上から見るメガネ橋